原 著

初めて親になる男性における，父親としての発達と パートナーの里帰りとの関連

Relationship between development as a father and partners' return
to their parents' home around childbirth among first time fathers

溝 口 巴 奈 (Hana MIZOGUCHI)*¹
川 田 紀美子 (Kimiko KAWATA)*²

抄 録

目 的

初めて親になった男性における，父親としての発達とパートナーの里帰りの有無および里帰りに関する各要因との関連について検討することを目的とした。

対象と方法

第1子出生後約1か月が経過した男性345名を対象に，7産科医療施設で無記名自記式質問紙調査を行った。質問項目は，父親になることによる発達尺度，主観的幸福感尺度，基本的属性，里帰りの形態，里帰り期間中の父親の生活実態である。里帰りの有無および里帰りに関する各要因と2つの尺度得点との関連について，Mann-Whitney U検定またはKruskal-Wallis検定を行った。

結 果

本研究対象者においては，パートナーの里帰りの有無によって，産後1か月での父親としての発達尺度得点に有意な差はみられなかった。

里帰り群において，「父親になることによる発達尺度」と統計上有意な正の関連があった項目は，パートナーの里帰り期間中に，毎日電話をすること，里帰り後の育児をストレスに感じる事，自分自身の家事をストレスに感じる事，であった。また，有意な負の関連があった項目は，生まれた子どもとの心理的な距離を感じる事であった。

結 論

里帰り期間中にパートナーと電話で毎日連絡を取ることで，父親の子どもを通しての視野の広がりにつながる事，生まれた子どもとの心理的な距離を感じていた者は家族に対する愛情が低かったことが明らかになり，パートナーが里帰り期間中の男性に対して，母子への積極的なコミュニケーションを促す支援の重要性が示唆された。

また，里帰り後の育児や里帰り期間中の家事をストレスに感じることは，父親としての役割を遂行しようとする模索する，発達プロセスの初期段階にあたると考えられた。以上より，パートナーが里帰りをす

*¹ 杏林大学医学部付属病院 (Kyorin University Hospital)

*² 九州大学大学院医学研究院保健学部門看護学分野 (Division of Nursing Sciences Department of Health Sciences, Faculty of Medical Sciences, Kyushu University)

2019年3月30日受付 2019年9月25日採用 2019年12月27日公開

る男性に対しては、育児に関する知識の提供や育児家事行動について考える機会を与えることが重要であるという示唆を得た。

キーワード：父親，発達，里帰り，産後1か月

Abstract

Purpose

This study aimed to compare differences in men's development as a father based on whether their partners had returned home, and to examine the relationship between development as a father and factors related to returning home.

Method

An anonymous self-administered questionnaire survey was conducted at seven obstetric medical facilities among 345 men approximately one month after their first child was born. The question items included the Developmental Scale of Becoming a Father, the Subjective Well-Being Scale, basic attributes, the form of returning home, and the actual condition of the father's life during the returning period. Mann-Whitney U tests or Kruskal-Wallis tests examined the relationship between factors related to returning home and two scales' scores. Additionally, the scores were compared by the partner's presence or absence at home.

Result

There was no difference in the development as a father one month after the child's birth regardless of whether their partners had returned to their parents' home.

In the group whose partners returned home, there were four items significantly related to scores on the Developmental Scale of Becoming a Father: daily contact with partner via telephone; stressed about childcare and domestic household chores; and feeling psychologically distant from the child. There were significant negative associations with the last item.

Conclusion

Those who contacted their partners daily during returning period had expanded perspectives by having a child, and those who felt psychologically distant from the child showed less affection to their families, suggesting the importance of active communication.

Furthermore, it was suggested that those who were stressed about childcare and domestic household chores were developing as fathers by seeking to combine and fulfill their roles. These men may have been in the early stages of the process of developing as a father. Therefore, it is important for men whose partners are returning or planning to return home to obtain parenting knowledge and have opportunities to think about parenting behavior.

Key words: fathers, development, return to parents' home, one month after childbirth

1. 緒 言

里帰り出産は、産後の女性の産褥復古支援となる、育児不安が解消されるなどのメリットがある(小林, 2010)一方で、夫婦関係、父子関係が確立されにくいなどのデメリットも指摘されている(品川他, 1980)。しかし、その具体的な数や割合などの最近のデータは存在しておらず、現代の里帰りの実態については明らかになっていない。とりわけ、「父親にとっての里帰り」という視点からの研究成果は十分ではなく、特に里帰りに伴う新生児と父親の分離について具体的に注目した研究は存在しないとの報告がある(大賀, 2009)。児の誕生後4か月、1年、2年での父親の対児感情を調査した先行研究では、里帰りをした群の父親

の方が子どもに対する負の感情をもっていたと報告(久保他, 2012)されている。しかしその具体的な要因については検討されておらず、また里帰り期間中の父親の生活状況との関連についての報告も現時点ではない。

父親としての発達に影響を及ぼす要因について、先行研究では、育児・家事への参加経験と深く結びついているといった報告(柏木他, 1994)や、育児への関心、子供との遊びや世話などといった育児関与が影響しているといった報告(森下, 2006)がある。しかし出産前後にパートナーが里帰りをすると、父親は児と関わる機会が減ることが予想される。特に産後1か月という時期は、退院後初めて自分たちの手で育児を行う過程を含んでおり、男性が父親であるという自覚を

図1 本研究の概念枠組み

持ち、発達していく上で非常に重要な時期である。この重要な時期の別居生活により、親となった男性は父親実感を抱きづらく、父親としての発達にも負の影響を及ぼすのではないかと考えた。

パートナーが里帰り期間中の夫は、家族との別居生活を送ることになるという点で単身赴任者と同じような境遇にあると考えられる。森山他 (2012) は、単身赴任者は家族と同居している者に比べて、イライラ感や不安感などが高いと報告している。また Hiroto N, et al (2006) は、単身赴任者は毎日の家事によるストレスを抱えている者の割合が高かったと報告している。以上より、家族と離れて一人で生活をするということは、父親の心理的なQOLを低下させる可能性が示唆された。特に産後1か月という子育てにおいて重要な時期に心理的QOLが低下してしまうと、父親としての発達にも影響を及ぼす可能性を考えた。

以上より、本研究では、初めて親になる男性における父親としての発達と、パートナーの里帰りの有無および里帰りに関する各要因との関連について検討することを目的とした。本研究の意義は、パートナーが里帰りをした男性の父親としての発達を促す支援についての示唆を得ること、また父親としての自覚を促し、育児への意識を高めるなどといった産後のスムーズな父子関係確立への支援についての示唆を得ることであると考える。

II. 概念枠組み

本研究の概念枠組みを図1に示す。本研究では、初めて親になる男性の父親としての発達に、パートナーの里帰りが関連しているかどうか、関連するとすれば、具体的にどのような要因が関連するかについて検証を行った。また、パートナーの里帰りは、男性の主観的幸福感を低下させ、父親としての発達に負の影響を及ぼす、という仮説を検証し、パートナーの里帰りが男性の主観的幸福感に及ぼす影響について考察した。

III. 用語の操作的定義

(1) 里帰り

出産前後に、パートナーと子が夫から一時的に離れて暮らすことであり、開始時期や期間は問わない。

(2) 父親としての発達

柏木他 (1994) は、人格的・社会的な行動や態度の変化を親の発達とし、親になって「自分が成長した」とか、子育ての意味として「自分の成長」と言われてきたことは、多角的なものを見る、他者の立場や公共的見地に立って考え自己抑制的に行動する、物事に柔軟にそして粘り強く対処する、などといったさまざまな面にわたる人格的な発達であることを明らかにしている。また森下 (2006) は、父親になることによる発

達を、男性が親になり子育てをする中での精神面と行動面における獲得と喪失を含む変化と定義している。よって本研究では、父親としての発達を「男性が父親になったことによる変化とそれに伴う人格的成長」と定義する。

(3) 主観的幸福感

伊藤他 (2003) が提言する主観的幸福感の概念を参考に、「自己の生活に対する満足感からなる認知的側面と、ポジティブ感情・ネガティブ感情を含む感情的側面から構成される、QOLの主観的あるいは心理的側面」と定義する。

IV. 研究方法

1. 研究デザイン

無記名自記式質問紙による横断的調査研究

2. 調査対象

第1子を出産後約1か月が経過し、かつ産後の母子の経過に異常がなかったパートナー（婚姻の有無は問わない）を持つ男性345名。調査時期は第1子の出生後1か月ごろ（1か月健診の時期）とした。この時期の男性を対象とした理由は、大賀他（2005）の報告によると、里帰り期間の平均は約1か月であり、南他（2006）、小林（2010）の報告でも1か月が最も多かったことから、里帰り中や里帰り終了直後の状況が把握できると考えたからである。

3. 調査期間

2018年5月から9月まで質問紙の配布を行い、10月までを回収期間とした。

4. 調査方法

福岡県内のローリスク分娩を多く取り扱う7つの医療施設で調査を行った。各施設において、研究者または施設のスタッフが1か月健診のため来院した褥婦へ研究の説明を行い、同意が得られた方に研究説明書、質問紙、返信用封筒を配布し、持ち帰ってパートナーに手渡してもらった。また、男性が来院しているときは、直接説明し、配布した。質問紙の回収は、同封の返信用封筒にて郵送してもらった。

5. 調査内容

父親になることによる発達尺度、主観的幸福感尺

度、基本的属性、里帰りの形態、里帰り期間中の父親の生活実態である。

1) 父親になることによる発達尺度

森下により開発された「父親になることによる発達尺度」は、父親になることによる変化をみる尺度である。第1因子「家族への愛情」は家族や家庭を基盤とした生活への移行における心情の変化を表している。第2因子「責任感や冷静さ」には、仕事への責任感の強まりや物事の捉え方の変化、急な事態が生じて動じない冷静さ、思慮深さが含まれている。第3因子「子どもを通しての視野の広がり」は子育てを通してこれまで気にしていなかった事柄や他者へ目を向けるようになる項目である。第4因子「過去と未来への展望」は、子どもとの関わりを通して自身の過去や未来を思い描く内容である。第5因子「自由の喪失」は自由に使える時間や金銭の減少などの喪失面を表している。回答は、「親になりお子様と関わる中で、ご自身の中でどのように変化したと感じていらっしゃいますか」という質問に対して、(5) 大変当てはまる～ (1) 全く当てはまらない、の5段階のリッカート法を用い、得点が高いほど発達していることを示す。なお、親になる前と後で変わらなかった項目については、1を選択するように説明した。尺度開発者に確認のうえ、「小さいのに色々考えたりしている子どもと話す」と楽しいと感じるようになった」を除外した29項目を使用した。各因子に高い負荷を示す項目群の信頼性係数（Cronbach の α ）は、第1因子から順に、0.87, 0.85, 0.81, 0.67, 0.58である。各因子に含まれる項目の平均値を算出し、それぞれを尺度得点とする（森下, 2006）。尺度の使用について、著者に許可を得た。

2) 主観的幸福感尺度

伊藤他により開発された「主観的幸福感尺度」は、主観的幸福感を、自己の生活に対する満足感からなる認知的側面と、ポジティブ感情・ネガティブ感情を含む感情的側面からとらえて評価する尺度である。この尺度は、青年から成人までの幅広い年代に適応可能であり、子育て期の父親を対象とした研究でも用いられている（伊藤他, 2004）。本研究では、心理的なQOLを測る尺度として主観的幸福感尺度を使用した。「人生に対する前向きな気持ち」「自信」「達成感」「人生に対する失望感のなさ」の4領域12項目で構成され、回答には質問ごとに異なる4件法を用いる。「人生に対する失望感のなさ」に含まれる3項目は、逆転項目である。得点の範囲は12～48点であり、得点が高いほど幸福感が

強いことを示す。尺度全体のCronbachの α 係数は0.86であり、信頼性が確認されている(伊藤他, 2003)。尺度の使用について、共著の1人に許可を得た。

3) 基本的属性

基本的属性は、年齢、就労形態、同居人、パートナーの年齢、夫婦関係、出産前後での夫婦関係の変化である。

4) 里帰りの形態

里帰りの形態は、里帰りの日数と時期、パートナーの里帰り先、里帰り中の夫の滞在先である。

5) 里帰り期間中の父親の生活実態

里帰り期間中の父親の生活実態は、子どもとの接触頻度、コミュニケーションツールと連絡頻度、心配事やストレスの有無である。

6. 分析方法

まず、全ての回答は数値化して単純集計を行った。次に「父親になることによる発達尺度」の因子別得点と里帰りの形態および里帰り期間中の父親の生活実態との関連について分析を行った。2群の標本に関しては、統計解析ソフトウェアIBM SPSSver.25を用いてMann-Whitney U検定を行った。3群以上の標本に関しては、Excel統計解析ソフトBellCurve for Excel windows Ver.2.21を用いてKruskal-Wallis検定を行った。(尚、複数回答の解析について、本研究は探索的研究であることから、多重性への配慮は行わないこととした。)有意水準は5% (両側検定) とした。

7. 倫理的配慮

対象者には、書面と口頭により本調査の目的や方法について十分な説明を行った。その際に、アンケートは無記名であり個人は特定されないこと、参加は自由であること、参加の有無で対象者に利益や不利益がないこと、アンケートの提出をもって本研究の参加に同意したものとすること、研究の参加に同意した後でもアンケート提出までは同意を取り消すことができることを伝えた。本研究は、九州大学の倫理審査委員会の許可を得て実施した(許可番号30-26)。

V. 結 果

1. 対象者

配布数は345、回収数は120であった(回収率34.8%)。そのうち、今回の出産で生まれた子が第1子

でない者を除外し、113名を分析対象とした(有効回答率94.2%)。

2. 基本的属性

本研究対象者の基本的属性について表1に示す。対象者の年齢は22~48歳で、平均32.2歳($SD \pm 5.3$)、パートナーの年齢は22~41歳で、平均30.7歳($SD \pm 3.9$)であった。パートナーの里帰りの有無については、「した」が54.0%、「していない」が27.4%、「里帰りはしていないが自宅へ実母などが滞在し支援があった」が18.6%であった。本研究では、「里帰り」をパートナーと子が夫から一時的に離れて暮らすことと定義しているため、各尺度との関連を見る際には、里帰り期間中の夫の滞在先がパートナーの実家であった者については、パートナーや子どもと一緒に生活していたと判断し、非里帰り群として扱うこととした。よって、パートナーの里帰りの有無について「した」と回答した54名を里帰り群、「した」と回答した者のうち夫の滞在先がパートナーの実家であった者および「していない」「自宅に実母などが滞在し支援があった」と回答した59名を非里帰り群とした。両群間において本研究調査項目の基本的属性に差がないことを確認するためにMann-Whitney U検定またはカイ2乗検定を行った結果、基本的属性の全ての項目に有意な差はみられなかった。

3. 里帰りの形態と里帰り期間中の生活実態

里帰りの形態及び里帰り期間中の父親の生活実態についての集計結果を表2に示す。里帰り群のうち、妊娠中からの里帰りであった者は24.8%、産後の里帰りであった者は29.2%であった。里帰りの日数について、妊娠中からの里帰りであった者の平均は98.3日、産後の里帰りであった者の平均は30.8日であった。里帰り中の夫の滞在先では、パートナーの実家と答えた者が11.5%存在していた。里帰り期間中に子どもに会った頻度は、「毎日」が23.0%、「2~6日に1回」が31.1%、「1週間に1回」が14.8%であった。パートナーの出産後、里帰り期間中に使っていたコミュニケーションツールについては、「電話」が38名、「メール(LINEなど)」が57名、「テレビ電話(Skypeなど)」が14名で、使用頻度については、それぞれ毎日使用していた者は「電話」14名、「メール(LINEなど)」52名、「テレビ電話(Skypeなど)」5名であった。

表1 基本的属性

属性	選択肢	里帰り群 (n=54)	非里帰り群 (n=59)	p 値
		n (%)		
年齢		31.0	31.0	n.s.*
	20～29	18 (33.3)	20 (33.9)	n.s.
	30～39	27 (50.0)	36 (61.0)	
	40歳以上	9 (16.7)	3 (5.1)	
就労形態	日中就労	43 (79.6)	45 (76.3)	n.s.
	不規則勤務	6 (11.1)	8 (13.6)	
	交代勤務	3 (5.6)	4 (6.8)	
	夜勤業務	1 (1.9)	0	
	その他	1 (1.9)	2 (3.4)	
同居人	パートナーのみ	53 (100)	55 (93.2)	n.s.
	パートナーとその両親	0	2 (3.4)	
	パートナーとその母	0	2 (3.4)	
パートナーの年齢		30.0	31.0	n.s.*
	20～29	21 (38.9)	26 (44.1)	n.s.
	30～39	33 (61.1)	31 (52.5)	
	40歳以上	0	2 (3.4)	
夫婦関係	大変満足している	32 (59.3)	32 (54.2)	n.s.
	まあ満足している	20 (37.0)	25 (42.4)	
	あまり満足していない	2 (3.7)	2 (3.4)	
	全く満足していない	0	0	
出産前後での夫婦関係の変化	良好になった	13 (24.1)	12 (20.3)	n.s.
	少し良好になった	5 (9.3)	9 (15.3)	
	変化なし	33 (61.1)	33 (55.9)	
	少し悪化した	2 (3.7)	4 (6.8)	
	悪化した	1 (1.9)	1 (1.7)	

カイ2乗検定, n.s.: no significant

*Mann-Whitney U検定, の数値は中央値

表2 里帰りの形態および里帰り期間中の父親の生活実態 n=61

項目	選択肢	平均値±SD	n (%)
里帰りの日数		61.6±48.9	
	妊娠中から	98.3±51.8	
	産後から	30.8±9.4	
里帰り先	同市郡内		23 (37.7)
	同県内		18 (29.5)
	県外		20 (32.8)
夫の滞在先	夫婦の家		50 (82.0)
	あなたの実家		2 (3.3)
	パートナーの実家		7 (11.5)
	その他		2 (3.3)
接触頻度		8.97±10.00	
	1日に1回		14 (23.0)
	2～3日に1回		10 (16.4)
	4～6日に1回		9 (14.7)
	7日に1回		9 (14.8)
	10～45日に1回		19 (31.1)
コミュニケーションツール*			
	電話		38
	メール (LINE など)		57
	テレビ電話 (Skype など)		14
	その他		0
使用頻度*			
	電話		
毎日			14
	毎日以外		24
メール (LINE など)	毎日		52
	毎日以外		5
テレビ電話 (Skype など)	毎日		5
	毎日以外		9

*複数回答

4. 里帰りに関する各要因と父親になることによる発達尺度との関連

里帰り群54名において、里帰りに関する各要因の「父親になることによる発達尺度」の各因子得点の分布の差をみるために、Mann-Whitney U検定、Kruskal-Wallis検定を行った。その結果を表3に示す。

父親になることによる発達尺度の各因子別得点において、里帰り群と非里帰り群との間には有意な差はみられなかった。

里帰り中のコミュニケーションの頻度では、電話をしたのが「毎日」群と「毎日以外」群との間に、第3因子「子どもを通しての視野の広がり」で有意な差がみられた。

またパートナーの里帰りによる心配事やストレスについては、複数回答で回答を求めた。「生まれた子どもとの心理的な距離」を選択した群と選択していない群との間では第1因子「家族への愛情」で、「家事などの自分自身の生活面」を選択した群と選択していない群では第4因子「過去と未来への展望」で、「里帰り後の育児に関すること」を選択した群と選択していない群では第5因子「自由の喪失」で有意な差がみられた。

5. 里帰りの有無と主観的幸福感尺度との関連

里帰りの有無による主観的幸福感尺度総点の分布の差をみるために、Mann-Whitney U検定を行った。結果を表4に示す。主観的幸福感尺度の総点において、里帰り群と非里帰り群との間には有意な差はみられなかった。

6. 「父親になることによる発達尺度」「主観的幸福感尺度」単純集計

本研究対象者における「父親になることによる発達尺度」各因子別得点と「主観的幸福感尺度」総点については、先行研究結果と比較する目的で平均値と標準偏差を算出した。(表3, 表4)「父親になることによる発達尺度」各因子別得点の平均値は、第1因子から順に、 4.43 ± 0.52 , 3.21 ± 0.83 , 3.14 ± 0.81 , 4.02 ± 0.90 , 3.41 ± 0.91 であった。「主観的幸福感尺度」総点の平均値は、 36.81 ± 4.84 であった。

VI. 考 察

1. 対象者

本研究対象者とパートナーの平均年齢は、平成28

年人口動態統計結果である第1子出産時の平均年齢32.8歳、30.7歳(厚生労働省, 2018)とほぼ一致していた。

2. 現代の里帰りの形態

里帰り分娩(妊娠中からの里帰り)をした者の割合に関しては、先行研究によると43.9~46.4%(瓢風, 1987; 久保他, 2012; 大島他, 1998)であり、本研究対象者の方が極めて低い結果となった。一方、自宅に実母などが滞在し支援を受けていた者と産後に里帰りをした者とを合わせると、本研究対象者全体の72.6%が産後に何らかの支援を受けていたと考えられ、産後のサポートのニーズが高かったことが推察された。小林(2010)は、現代の里帰りは、従来の都市から地方への里帰り分娩のみならず、産後の実家里帰りや実母の出張援助の形態も見られていたと述べている。本研究対象者においても、妊娠中から実家に帰る里帰り分娩のみならず、様々な形で支援を受けている現状が明らかになった。

里帰りの日数について、本研究対象者のうち産後里帰りであった者の日数は大賀他(2005)の報告による平均32.9日とほぼ一致していた。また、妊娠中から里帰りをしていた者については、質問紙配布が1か月健診時であったことから考えると、おおむね妊娠30週頃に里帰りをしていたのではないかと推測される。大賀他(2005)の研究対象者には、妊娠9か月で里帰りした者が最も多く、10か月、8か月と続いていた。本研究対象者では、妊娠中からの里帰りの約半数は県外からの里帰りであり、公共交通機関などを安全に利用できる時期に里帰りしていたと推察される。

本研究対象者では、里帰り中の夫の滞在先がパートナーの実家であった者が存在した。大賀他(2005)の報告でも、妊娠中から、または産後に夫婦でどちらかの実家に里帰りをするパターンであった者が存在し、父親非分離型里帰りとしていた。このような形態の里帰りは、母親が十分な支援を受けられることに加え、産後早期の父子分離が無い場合、母親と父親の双方にとってメリットがあると言える。しかし本研究対象者の中には、里帰りによる心配事やストレスの質問項目において「義父や義母との人間関係」を選択していた者もあり、パートナーの実家に滞在することで精神面に負の影響を与える可能性も明らかになった。里帰りについては夫婦で話し合いお互いが納得できる形で行うことが大切であると考えられる。

表3 里帰りに関する各要因と「父親になることによる発達尺度[‡]」との関連

項目	選択肢	選択者(人)	家族への愛情	責任感や冷静さ	子どもを通しての視野の広がり	過去と未来への展望	自由の喪失
里帰りの有無	全体	113	4.50 (4.43±0.52)	3.25 (3.21±0.83)	3.14 (3.14±0.81)	4.0 (4.02±0.90)	3.33 (3.41±0.91)
	里帰り群	54	4.50 (4.40±0.50)	3.25 (3.09±0.82)	3.14 (3.03±0.79)	4.0 (3.98±0.83)	3.33 (3.30±0.91)
	非里帰り群	59	4.63 (4.46±0.54)	3.38 (3.32±0.83)	3.29 (3.24±0.81)	4.0 (4.05±0.97)	3.67 (3.52±0.90)
里帰りの各要因(里帰り群, n=54)							
里帰りの日数 [†]	40日以下	26	4.50	3.32	3.14	4.17	3.33
	41日以上	24	4.25	3.13	2.86	3.67	3.33
里帰りの様式	妊娠中から	25	4.50	3.25	3.14	4.00	3.33
	産後から	29	4.25	3.19	2.86	3.67	3.33
里帰り先	同市郡内	16	4.25	3.01	3.16	3.67	3.33
	同県内	18	4.50	3.32	3.08	4.00	3.67
	県外	20	4.50	3.25	2.86	4.00	3.00
夫の滞在先	自宅	50	4.50	3.25	3.14	4.00	3.33
	自宅以外	4	4.44	3.19	3.02	4.34	3.17
子どもとの接触頻度	毎日	7	4.38	3.00	3.29	4.00	3.00
	1週間以内	28	4.25	3.25	3.14	3.84	3.67
	1週間以上	19	4.63	3.25	2.86	4.00	3.00
コミュニケーションツール 電話	使用	35	4.44	3.25	3.07	4.00	3.33
	未使用	19	4.50	3.00	3.14	3.67	3.33
コミュニケーションツール テレビ電話	使用	13	4.38	3.25	3.16	3.67	3.00
	未使用	41	4.50	3.25	3.00	4.00	3.33
連絡頻度・電話	毎日	12	4.50	3.25	3.43	4.67	3.33
	毎日以外	42	4.32	3.19	2.86	4.00	3.33
連絡頻度・メール	毎日	49	4.50	3.25	3.14	4.00	3.33
	毎日以外	5	4.38	3.13	2.86	4.00	3.67
連絡頻度・テレビ電話	毎日	4	3.91	3.19	3.02	3.67	3.17
	毎日以外	50	4.50	3.25	3.14	4.00	3.33
<心配事やストレス>							
パートナーとの心理的な距離	選択	7	4.32	3.25	2.93	3.84	3.50
	未選択	47	4.50	3.25	3.14	4.00	3.33
生まれた子どもとの心理的な距離	選択	8	3.88	3.25	3.00	4.00	3.67
	未選択	46	4.50	3.25	3.14	4.00	3.33
里帰り後の育児に関すること	選択	8	4.50	3.25	3.17	4.67	4.00
	未選択	46	4.38	3.25	3.00	3.84	3.00
夫婦関係に関すること	選択	2	4.25	2.07	2.93	4.50	2.84
	未選択	52	4.50	3.25	3.14	4.00	3.33
パートナーの体調面	選択	15	4.50	3.13	2.86	4.34	3.17
	未選択	39	4.38	3.25	3.14	3.67	3.33
生まれた子どもの体調面	選択	17	4.50	3.13	2.72	4.34	3.67
	未選択	37	4.38	3.25	3.14	3.67	3.33
家事などの自分自身の生活面	選択	12	4.75	3.25	3.29	4.67	3.67
	未選択	42	4.38	3.25	2.86	3.67	3.17
仕事に関すること	選択	3	4.75	3.63	3.29	4.33	3.33
	未選択	51	4.44	3.25	3.07	4.00	3.33
経済的な面	選択	5	4.38	3.00	2.86	4.00	4.00
	未選択	49	4.50	3.25	3.14	4.00	3.33
義父や義母との人間関係	選択	4	4.44	3.32	2.58	3.50	3.50
	未選択	50	4.50	3.25	3.14	4.00	3.33

2値データ：Mann-Whitney U検定, 3値以上：Kruskal-Wallis検定

数字は中央値, () は平均値±標準偏差, *p<0.05, **p<0.01

[†]里帰り群における里帰り日数の中央値は40であった[‡]5つの下位尺度「家族への愛情」「責任感や冷静さ」「子どもを通しての視野の広がり」「過去と未来への展望」「自由の喪失」からなり, 各下位尺度得点の範囲は1~5点である

表4 里帰りの有無と「主観的幸福感尺度」との関連

n=113			
項目	選択肢	選択者(人)	主観的幸福感尺度(総点) p 値
全体		113	37.0 (36.81±4.84)
里帰りの有無	里帰り群	54	37.0 (36.23±5.38)
	非里帰り群	59	37.0 (37.34±4.28)

数字は中央値, () は平均値±標準偏差, *p<0.05 (Mann-Whitney U検定)

3. 里帰り期間中の父親の生活実態

里帰り中に子どもと会った頻度について、南他(2006)の報告では、「ほぼ毎日会っていた」が27.3%、「数日に1回くらい」が36.4%、「1週間に1回くらい」が21.2%であり、毎日会っていた者と数日に1回会っていた者の割合は本研究対象者とほぼ変わらない結果となった。一方、1週間に1回程度会った者の割合は少ない結果となった。本研究対象者で10日以上に1回と答えた者の約85%がパートナーの里帰り先を県外と答えており、頻繁に会いに行けるような地理的条件ではなかったためであると考えられる。

4. 父親としての発達とコミュニケーション

里帰り期間中にパートナーと「毎日」電話をすることと「子どもを通しての視野の広がり」とは有意な関連があった。電話を「毎日」することで、周りの親子連れや子どもへより関心を向けるようになっていたと推察される。この得点は非里帰り群と比較しても高かったことから、パートナーの里帰りによって離れて暮らしている環境であっても、毎日コミュニケーションをとることによってその障害は相殺され、父親になったということを実感し発達していたのではないかと考える。また、生まれた子どもとの心理的な距離を感じていた者は、「家族への愛情」の得点が有意に低かった。これは、里帰りによって子どもと触れ合う機会が減少することやコミュニケーションを十分にとれていないことから生じる心理的距離であると考えられる。そのことがストレスとなり、家族への愛情や家族の中での安らぎや幸せを感じることに負の影響を与えていると推察される。海外赴任中でわが子の誕生に直接かかわれなかった米軍兵士が、携帯メールなどを通して頻繁に妻・児と会話をすることで、離れていても児にかかわり、妻をサポートしていると実感もったという報告(Schachman, 2010)もあり、里帰り中のパートナーを持つ父親としての発達過程においては、家族とつながっていることや児との関わりを実感でき

るようなコミュニケーションをとることが重要な因子であると考えられる。

古川(2013)は、コミュニケーションは人間関係において互いを理解するために不可欠であり、分離型里帰り分娩のように夫婦が別々に暮らす場合、様々なコミュニケーション手段の活用を検討する必要性が生じると述べている。本研究においては、それぞれの生活スタイルに応じた手段を用いて連絡をとりあうことと、それを「毎日」続けることが、夫婦それぞれの気持ちの安定につながり、親になる過程においてもプラスになると示唆された。

5. 父親としての発達と育児家事行動

里帰りによる心配事やストレスにおいて、「里帰り後の育児に関すること」を選択した者は「自由の喪失」得点が有意に高かった。つまり、里帰り期間中に今後の育児についての心配やストレスを感じていた者ほど、自由がなくなっただと感じているということである。またこの項目については非里帰り群と比較しても得点が高かった。里帰り群は子どもと関わる機会が少ないため自分の時間をより多く持つことができ自由の喪失を感じにくいと予測したが、本研究では逆の結果となった。これは、早い時期からパートナーの里帰り後の育児について考え、あるいはその準備に時間を使うことによって、自由な時間が失われたと感じていると推察される。実際に、「里帰り後の育児に関すること」を選択した8名のうち7名が、パートナーの里帰り期間中に育児の準備をしていたと回答した。森下(2006)は、自由に対する喪失感は、親になる過程において必然的な変化であると述べている。また西尾他(2012)は、子どもの誕生によって個人の自由は失うかもしれないが、家族に対する愛情や責任感が芽生えることで父親となる発達を成し遂げることができると述べている。里帰り後の育児について考えることで自由の喪失感を感じることは、父親としての生活に適応していくにあたって必要なことであり、父親としての発達を意味することが示唆された。

さらに、パートナーの里帰り期間中に「家事などの自分自身の生活面」をストレスに感じていた者は「過去と未来への展望」の得点が有意に高かった。つまり、家事をストレスに感じていた者は、パートナーの里帰り期間中に自身の過去について振り返り、これからの未来を思い描いていたと解釈できる。また、パートナーの里帰りにより父親が一人で生活するよう

になったことで、里帰り前と比較して家事の負担が重くのしかかっていたことが推察される。塩澤他(2007)は、性役割に対して平等主義的な父親は育児家事実施意欲が高いと報告しているが、里帰り前には気にかけていなかったかもしれない家事に対して自身がその大変さを経験することで、これまでの生活を見直し、パートナーが自宅に帰ってきた後も協力しながら育児や家事を行っていくことの大切さを実感していたのではないかと推察される。ストレスの経験を通じてコーピングスキルや肯定的な自己概念を獲得し成長していくことは、ストレス関連成長(Stress-Related Growth)と定義されている(Park, et al. 1996)。また川原(2017)は、＜ネガティブな心理状態＞から＜気づき＞や＜チャレンジ＞という段階を経てストレス関連成長が生じると述べている。本研究対象者では育児や家事をストレスに感じる事が父親としての発達と関連していたが、これは一時的なストレスにさらされながらも親としての役割を遂行しようと模索している過程を示したのではないかと考えられる。また河本他(2018)の報告によると、父親は妻の妊娠中から育児期にかけて、初めての育児に対してマイナスの感情を抱いていたが、その後の育児経験を通して父親として成長していく中で、マイナスの感情と折り合いをつけることができるようになっていたと述べられている。産後1か月という時期には、父親を取り巻く環境が目まぐるしく変化することでマイナスの感情を抱くこともあるが、それは父親として成長していくプロセスの一部であり、発達の初期段階にあるのではないかと考えられた。

先行研究では、出産準備教育に参加した父親は育児家事実施意欲が有意に高く、育児家事行動をとるきっかけとなりうるとの報告(塩澤他, 2007)や、子どもの誕生前に子育ての知識があるか否かによって子育てに対する意味付けに違いが生じ、その後の子育て行動に影響を及ぼしていたとの報告(中村, 2016)がある。このことから、パートナーが里帰りをした、またはする予定がある男性に対しては、例えば両親学級や父親学級などを通して育児の知識や今後の育児家事行動について考える機会を与えることが有効である可能性がある。しかし、両親学級や父親学級などに参加する父親はもともと意識が高いことも考えられるため、様々な層の父親に参加してもらうための啓発や参加者を増やすための工夫が必要であると考えられる。

6. 里帰りの有無と父親としての発達及び主観的幸福感との関連

本研究結果からは、産後1か月での父親としての発達は里帰りの有無とは関連がないことが明らかになった。前述したように、パートナーの里帰りによって子どもと関わる機会が減少した父親は、非里帰り群と比較して対児感情が低くなり、その後の父親としての発達に影響を及ぼすのではないかと考えたが、逆の結果となった。これについては、先行研究の対象者は子どもの誕生から1~5年程度経過した父親であったことから、子どもが産まれて1か月程度しかたっていない本研究対象者とは、父親になった後の期間が異なるためと考えられる。このことを考慮すると、本研究結果では父親としての発達に差はみられなかったが、縦断的調査を行うと先行研究と同様の結果が得られる可能性があるため、更なる研究が必要である。

また、本研究結果において、里帰り群と非里帰り群との間には主観的幸福感尺度の総点に有意な差はみられなかった。当初、里帰り期間中の男性は、単身赴任者と同様に不安やストレスが多く、それが心理的QOLを低下させると考えていた。しかし、単身赴任者は家庭を支えるために仕事をする事が目的で離れているのに対し、パートナーの里帰りにより一時的に離れて暮らしているだけの父親は、その期間が短く限定されているだけでなく、新たな命の誕生という大きな幸福感に包まれるイベントを経験し、また離れている間も連絡を取り合うことで心理的なつながりを感じることができると推察された。以上より、里帰り期間という限定された期間の別居生活では、父親の主観的幸福感は低下することなく、頻繁に連絡を取り合うことによって心理的な安定を保っているのではないかと考えられた。

7. 産後1か月における父親としての発達と主観的幸福感

「父親になることによる発達尺度」得点の平均値と標準偏差は、3~5歳の子どもを持つ父親を対象とした森下(2006)の報告では第1因子から順に、 4.35 ± 0.52 , 3.93 ± 0.69 , 3.39 ± 0.65 , 3.30 ± 0.61 , 3.56 ± 0.82 であり、第1因子と第4因子において本研究対象者群の平均値の方が高かった。産後1か月における父親としての発達という点では、「家族への愛情」と「過去と未来への展望」の2つの側面において、父親になったことによる変

化を強く認識している可能性が示唆された。また、「責任感や冷静さ」「子どもを通しての視野の広がり」「自由の喪失」といった項目は、子どもの育児を通して発達していく側面である一方、「家族への愛情」「過去と未来への展望」は、パートナーの出産経験や児の誕生直後からでも起こりやすい変化であることが示唆された。

主観的幸福感尺度の得点では、伊藤他 (2003) の調査による社会人男性の平均値は 35.24 ± 4.42 であり、本研究対象者群の平均値の方が高く、産後1か月の父親は、一般男性と比較してより強く幸福感を感じている可能性が示唆された。

8. 本研究の限界と今後の課題

本研究は、ローリスク分娩を取り扱う医療施設で出産し、産後の母子の経過に異常がなかったパートナーを持つ男性を対象とした。産後の母児分離や児のNICU入院などを経験した父親は対象としていないため、結果を一般化することが難しい。また里帰りの形態に関しては、地域によってばらつきがあることが分かっており、1つの県を対象としている本研究結果を一般化することは難しい。

パートナーの里帰り期間中の自身の生活について、自由回答ではプラスの面とマイナスの面の両方で揺れ動く複雑な感情をあらわしているものが多く見受けられた。今後はこの点についてさらに深く調査し、パートナーの里帰り期間中の父親の心理状態や、それが親としての発達にどのように影響しているのかについても検討していくことが必要であると考え。

VII. 結 論

本研究調査地域では、産後に里帰りをしている者の割合が多く、産後のサポートのニーズが高かったことが明らかになった。また、自宅に実母が滞在して支援する、パートナーの実家に夫婦で滞在する、などといった里帰りの多様な形態が明らかになった。

本研究結果では、パートナーの里帰りの有無によって、産後1か月での父親としての発達と主観的幸福感に有意な差はみられなかった。

里帰り群においては、里帰り期間中にパートナーと電話で毎日連絡をとることは子どもを通しての視野の広がりにつながり、離れて暮らしている状態であっても積極的にコミュニケーションをとることが、父親としての発達における重要な因子であることが示唆され

た。また、生まれた子どもとの心理的な距離を感じていた者は家族に対する愛情が低かったことから、コミュニケーションの重要性が示された。さらに、里帰り後の育児や里帰り期間中の家事をストレスに感じていた者は、父親としての役割を遂行しようと模索することでマイナスの感情と折り合いをつけながら父親として成長していることが示唆された。

これらのことから、パートナーが里帰りをする男性への看護として、里帰り期間中の積極的なコミュニケーションを促す支援や、育児知識の提供および育児家事行動について考える機会を与えることが重要であるという示唆を得た。

謝 辞

本研究にあたり、アンケートにご協力いただいた皆様、およびアンケートの配布にご協力いただきました7施設の皆様に謹んで御礼申し上げます。

本研究は2018年度九州大学医学系学府保健学専攻修士課程助産学コース修士論文の一部を加筆・修正したものである。

利益相反

本論文内容に関連する利益相反事項はない。

文 献

- 古川亮子 (2013). 分離型里帰り分娩を選択した夫婦のビデオ会話利用の効果. 母性衛生, 53(4), 467-477.
- Hiroto, N., Masaharu, Y., & Toh, M. (2006). Mental and Physical Effects of Tanshin funin, Posting without Family, on Married Male Workers in Japan. *Journal of Occupational Health*, 48, 113-123.
- 瓢風須美子 (1987). 里帰り分娩が家族の発達課題の達成に及ぼす影響. 母性衛生, 28(1), 144-152.
- 伊藤裕子, 相良順子, 池田政子, 川浦康至 (2003). 主観的幸福感尺度の作成と信頼性・妥当性の検討. 心理学研究, 74, 276-281.
- 伊藤裕子, 相良順子, 池田政子 (2004). 既婚者の心理的健康に及ぼす結婚生活と職業生活の影響. 心理学研究, 75, 435-441.
- 柏木恵子, 若松素子 (1994). 「親となる」ことによる人格発達: 生涯発達の視点から親を研究する試み. 発達心理学研究, 5(1), 72-83.
- 川原正人 (2017). ストレス関連成長のプロセスにおける共通性. 東京未来大学研究紀要, 10, 27-37.

- 河本恵理, 田中満由美, 杉下征子, 松生晴海 (2018). 父親になるプロセス. 母性衛生, 58(4), 673-681.
- 小林由希子 (2010). 出産前後の里帰りにおける実母の援助と母子関係・母性性の発達. 日本助産学会誌, 24(1), 28-39.
- 厚生労働省 (2018). 平成30年我が国の人口動態 (平成28年までの動向) <https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/dl/81-1a2.pdf> (アクセス2018.12.13)
- 久保恭子, 岸田泰子, 及川裕子, 田村毅 (2012). 出産前後の里帰りが父子関係, 父性, 夫婦関係に与える影響と支援方法. 小児保健研究, 71(3), 393-398.
- 南貴子, 小原敏郎, 武藤安子 (2006). 育児初期の母親の育児支援のあり方に関する検討—「産後の里帰り」経験に焦点をあてて—. 日本家政学会誌, 57(12), 807-817.
- 森下葉子 (2006). 父親になることによる発達とそれに関わる要因. 発達心理学研究, 17(2), 182-192.
- 森山葉子, 豊川智之, 小林廉毅, 井上和男, 須山靖男, 杉本七七子他 (2012). 単身赴任者と家族同居者における生活習慣, ストレス状況および健診結果の比較—MYヘルスアップ研究から—. 産業衛生学雑誌, 54, 22-28.
- 中村恵美子 (2016). 子育てに対する父親の思いの変化—フォーカス・グループ・インタビューによる父親の語りから—. 小児保健研究, 75(2), 254-260.
- 西尾敏, 中津郁子 (2012). 父親となる発達過程における「自由の制限」と親役割意識. 小児保健研究, 71(1), 67-73.
- 大賀明子, 佐藤喜美子, 諏訪きぬ (2005). 周産期における生活実態からみた「里帰り出産」. 母性衛生, 45(4), 423-431.
- 大賀明子 (2009). 里帰り出産に関する研究の動向と課題. 横浜看護学雑誌, 2(1), 64-68.
- 大島美由紀, 山田裕子, 梅田久美子, 大谷美和子, 早川有子 (1998). 父性意識の発達に影響を及ぼす要因の検討—地元分娩・里帰り分娩に焦点を当てて—. 栃木母性衛生, 25, 44-47.
- Park, C.L., Cohen, L.H., & Murch, R. (1996). Assessment and prediction of stress-related growth. *Journal of Personality*, 64, 71-105.
- Schachman, K.A. (2010). Online fathering: The experience of first-time fatherhood in combat-deployed troops. *Nursing Research*, 59(1), 11-17.
- 品川信良, 野村雪光 (1980). 里帰り分娩. 産婦人科MOOK, 12, pp.103-110, 東京: 金原出版.
- 塩澤真由美, 石田貞代, 萩原結花 (2007). 出産後早期における父親の育児家事実施意欲に関する研究—母親の期待・性役割態度・出産準備教育との関連—. 母性衛生, 47(4), 582-589.